《２０１０年１１月例会報告》

【日　時】2010 年 11 月 24 日（水）19：00～21：10（その後「ルン」～0：30 過ぎ。最終電車）
【会　場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）
【演　者】中塚義実（筑波大学附属高校教諭／サロン 2002 理事長）
【テーマ】「2010 年のサッカー環境」はどこまで実現したか
　　－10 年前に描いたユース年代のサッカー環境を検証する
【参加者（会員）11 名】笠野英弘（日本スポーツ振興センター／筑波大学大学院）　金子正彦（会社員）　岸卓巨（DUO リーグ事務局）　北原由（青梅 FC）　国島栄市（ビバ！サッカー研究会）　白井久明（弁護士）　高原渉（宝塚ジュニア FC）　中塚義実（筑波大学附属高校）　藤田直樹（ビバ！サッカー研究会）　福西達男（ポルベニルカシハラ・スポーツクラブ）　本郷由希（草サッカー／ヴィッセル神戸サポーター）
【参加者（未会員）3 名】古賀康彦（早稲田大学大学院スポーツ科学研究科／都立石神井高校サッカー部）　★高澤肇（スポーツマネジメント(株)）　★田中裕行（サッカー三昧）
【報告書作成者】中塚義実預かり
注１）★は初参加のため参加費無料
注２）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

＊＊

「2010 年のサッカー環境」は、どこまで実現したか

－10 年前に描いたユース年代のサッカー環境を検証する－

中塚義実（筑波大学附属高校／サロン 2002 理事長）

＊＊

＜目　次＞

Ⅰ．「2010 年のサッカー環境」を描く前に考えていたこと
１．「2002 年へ向けて」（1991.2.11.）…参考：研究会資料（1991.1.12.）＆シンポジウム企画書（1/25）
２．「関係委員会が希望する競技会と医・科学」（1996.2.11.）
　　…参考：ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ配布資料（2/11）＆東京都ﾕｰｽｻｯｶｰﾘｰｸﾞ構想（2/23）＆同計画（3/23）
３．「JCY の抱える課題」（2000.3.1.）
４．『フットサル連盟は必要か？』（2001.3.）
５．質疑応答①

Ⅱ．「2010 年のサッカー環境」とは…
１．JCY 理事会（2001.10.23.）「2010 年のサッカー環境構想－ユース年代を中心に」
２．「JFA と J リーグの協調・協力（2003.10.23.）」に描かれた将来像

Ⅲ．「2010 年のサッカー環境」はどこまで実現したか（ディスカッション）

皆さん、こんばんは。11 月の月例会、「育成期の指導を考える」シリーズです。今回は「環境」を取り上げます。

10 年ほど前から色々なところで構想を形にしており、「2010 年」を一つのターゲット年度としていました。今年がちょうど 2010 年です。どこまで達成できているのか、皆さんと一緒に検証していきたいと考えております。

Ⅰ．「2010 年のサッカー環境」を描く前に考えていたこと…

いくつかの資料を準備しました。一つは「第 11 回サッカー医・科学研究会（1991.2.11）」関連のものです。現在は「日本フットボール学会」となっています。オフィシャルな場所で初めて 2002 年のワールドカップに向けた内容を取り上げたものです。約 20 年前に、発案者である私が考えていたことがベースになっています。

さらにその数年後、1996.2.11 に行われた第 16 回サッカー医・科学研究会シンポジウム（当時私はサッカー協会の科学研究委員会の委員）「関係委員会が希望する競技会と医・科学」で 10 分間の発言チャンスがあり、それまで考えていたことをまとめて発表し、これがその後のベースとなりました。

また、JCY（日本サッカークラブ連盟：当時理事をしていた）の中長期検討委員会で「JCY の抱える課題」として、「2000 年度へ向けて」という議論をした中身があります。

そしてもうひとつ。冊子になっているものですが、サロン 2002 で「フットサルプロジェクト」を立ち上げ、『フットサル連盟は必要か？』について議論をしたまとめがあります。

本日のメインは「2010 年のサッカー環境」についてですが、その前段で、いろんなところで発信していたものを紹介し、その上で、当時、「2010 年のサッカー環境」はどのように描かれたのか、そして実際どこまで実現したのかを全員でディスカッションしていきたいと思います。

１．第 11 回サッカー医・科学研究会（1991.2.11.）シンポジウム「2002 年へ向けて」－ワールドカップを開催するために何をしなくてはならないか？

まず、資料（サッカー研・研究発表）をご覧ください。「1991.1.12　於上智大　担当：中塚」とありますが、当時、日本サッカー協会に、戸苅晴彦先生（当時東京大学）を委員長とする科学研究委員会があり、その委員会メンバー＋サッカーの医・科学に関心を持つ方々の研究会がありました（サッカー研究会）。月 2 回集まって文献紹介や研究報告をするのですが、体力測定やゲーム分析をされている方が多い中、私は数少ない「文系人間」で、いつもこのような話題を提供させてもらっていました。

「ワールドカップを開催するためには何をしなくてはならないか？」という発表タイトルは、サッカー医・科学研究会のシンポジウムと絡めて考えたことです。この翌月（1991.2.11）に、2002 年ワールドカップを取り上げたシンポジウムを企画していたので、そこでどのようなことを議論するか整理したかったのが、このときの研究会の発表テーマです。

まず「ソフト面＝組織作り」です。この時 J リーグはまだ構想の段階でした。次に「ハード面＝施設作り」。そして「強い代表チームを作る」。この三本柱で議論をしたかったのです。一つひとつ見ていくと時間がかかるので中身は省略しますが、最低限これらのことを踏まえた上で、2002 年へ向けて動き出さねばならないと考えていたようです。

資料の裏をご覧下さい。1991.1.25 に開催されたシンポジウムの趣旨、パネリスト、内容、時程が記録されています。当時、横山兼三氏が代表チーム（ユニフォームが赤かった頃）の監督をされていて、「強化の観点から」という内容のお話をしていただきました。川淵三郎氏にも来ていただき、記者発表前でしたがプロサッカーリーグ（J リーグという名前はまだ決まっていなかった）の構想をお話しいただきました。そして、どうしてもご登壇いただきたかったのが、関西の上田亮三郎先生です。先

生には指導者としての観点からお話をしていただきました。このシンポジウムの内容は、12 月に完成予定のサロン 2002 公開シンポジウム「2019 年ラグビーワールドカ日本大会を語ろう！」報告書に、寄稿の形で掲載していますのでそちらをごらん下さい。

２．第 16 回サッカー医・科学研究会（1996.2.11.）シンポジウム
「関係委員会が希望する競技会と医・科学」
→　この提案をもとに、DUO リーグを創設した（1996 年度～）

1996.2.11.に開かれた第 16 回サッカー医・科学研究会シンポジウム「関係委員会が希望する競技会と医・科学」で、当時考えていた構想がはっきり示されています。そしてこの 2 ヶ月後の 1996 年 4 月より、「DUO リーグ」をスタートさせました。

１）登録制度の改革と、現行の大会の整理整頓

構想の一つとして、登録制度の変更があります。ご存じのように、JFA の登録制度は、年間を通して固定のチームで、チームと選手が 1 セットになって登録するスタイルです。まず競技会への参加が前提となっているシステムを変えなければいけません。協会へはクラブ単位で加盟し、大会への参加は大会ごとにチーム登録する形をイメージしています。いわゆる個人登録のようなスタイルです。クラブが加盟した上で、個々のメンバーはクラブが把握し、競技会ごとに定められるレギュレーションに従ってチームを編成します。フットサルに近いかもしれません。

登録制度を変えないと補欠だらけになってしまいます。

２）リーグ戦を中心にした組織づくり

「リーグ戦を中心にした組織作り」は一つの柱です。9 地域リーグ（U-18 はこれぐらいのエリアが頂点でよいと考えた）をトップとし、その下に都道府県のリーグを整備していきます。

年間スケジュールを見直し、定期的なリーグ戦をベースにして 1 週間の生活サイクルを確立させます。そして次のことも盛り込みます。

① 年齢ごとに、チームでの練習日数の上限を決める（例：少年は週２回、それ以上はしない！
　中学は週 3 回＋ゲーム、高校は週 4 回＋ゲームを限度とする）。
② クラブの枠を超えた活動ができる日を週 1 日設ける
③ 選手は必ずオフを週 1 日以上とることを義務づける

サッカーをもっとしたい場合、自主的な活動は OK ですが、クラブという組織化されたところで行う場合は上限を設けた方が良いと考えます。そして、レベルに応じた場所で、所属クラブを離れてボールを蹴ることができる環境をつくります。これらのことを医・科学研のシンポジウムで提案し、年間スケジュール（試案）を提示しました。

３）トレセン制度の充実

トレセン制度は当時からありましたが、地域をベースにした発掘・育成の組織作りとして、9 地域トレセンを頂点とし、その下に都道府県トレセンを組織するイメージです。これは現在、すでに整備されています。そして選手の情報は、共通のデータ管理システムにより指導者間で共有できるようにします。図 2 と図 3 が同じつくりになっているのは、リーグとトレセン活動を同時に進めればよいとの考えからです。普段からゲームを行っているのでお互いのことはよくわかります。同じリーグに属する者同志、同じレベルの仲間と友達になることもできます。上位リーグの選手は上位リーグのトレセンに参加します。リーグ日程の間にトレセンの練習を組み込めばスムーズに進めることができます。

こうして、リーグ戦とトレセン活動を並行して進めていくのがよいと提案しました。

第16回サッカー医・科学研究会シンポジウム　1996.2.11.

「関係委員会が希望する競技会と医・科学」

科学研究委員会からの指定発言：資料

中塚義実

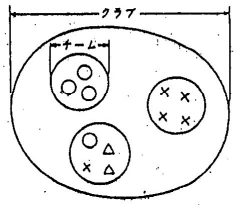
1．登録制度の改革と，現行の大会の整理整頓

ークラブワークとクラブ間のネットワークづくり

1) 協会へはクラブ単位で登録

2) 大会への参加は，大会毎のチーム登録とする

図1．チームとクラブの関係



2．リーグ戦を中心にした組織づくり

ーライフスタイルにサッカーを明確に位置づける

1) 9地域リーグを頂点とし，
その下に各都道府県のリーグを組織する

2) リーグ戦をベースにして，
年間スケジュールを見直す

3) 定期的な試合をベースにして，
1週間の生活サイクルを確立させる。そのために，

①年齢毎に，チームでの練習日数の上限を定める
（例：少年は週2回，中学は週3回＋ゲーム，高校は週4回＋ゲームを限度とする）

②クラブの枠を超えた活動（トレセン活動など）ができる日を週1日設ける

③選手は，必ずオフを週1日以上とることを義務づける

図2．「リーグ」の位置づけ

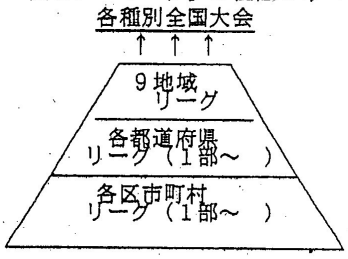
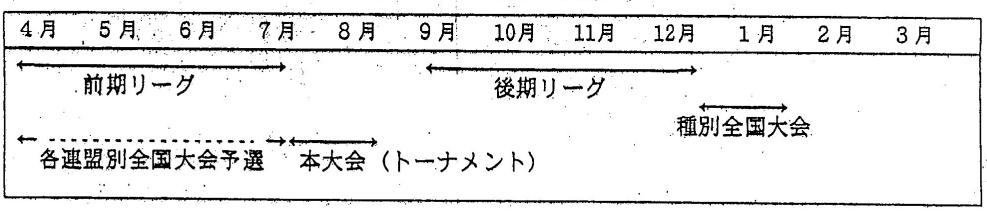


図4．リーグ戦をベースに考えた1年間の大会の流れ（試案）



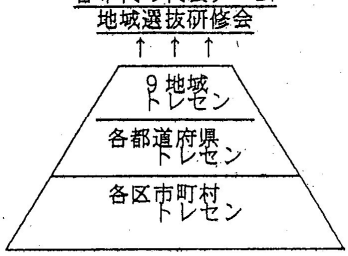
3．トレセン制度の充実

ー地域をベースにした発掘・育成の組織づくり

1) 9地域トレセンを頂点とし，
その下に各都道府県トレセンを組織する

2) 選手の情報は，共通のデータ管理システムにより
指導者間で交換できるようにする

図3．トレセン制度の位置づけ



4．指導者の育成

ー正しいスポーツ観，子ども観を持った指導者の育成が急務

5．サッカーをこの国に根付かせるために

ー組織されていないサッカー人口を大切に

4）指導者の育成

5）サッカーをこの国に根付かせるために

「指導者の育成」は、当たり前のことです。

「サッカーをこの国に根付かせるためにー組織されていないサッカー人口を大切に」ということも、これらの人々とうまく関わり合っていくべきだと考えていました。

この資料を作成するにあたり、サッカー協会の中にいる方々と「このようなことを考えていますけど、ピントはずれていませんか？」と何度かやりとりしました。研究者の方はあまりピンとこないようでしたので協会の事業部の方と何度か話をしたところ、必要性を理解していただきました。

シンポジウムで私が発表したことを受けて、当時女子委員会を担当されていた方が、女子の立ち上げに際し、私が発表したようなことを、女子のカテゴリーではすでに実践に移していると言っておられました。その後、どの程度実現したかは、定かではありません。

そして、シンポジウムの 10 日あまり後、「東京都ユースサッカーリーグ構想（案）」（1996.2.23）として、アタマの中にあったことを、リーグという形で具体化してみました。ここでのポイントは日程問題です。学校の 1、2 学期で本当にリーグ戦ができるのだろうかと思い、スケジュールに組み込んでみました。すると、定期試験や高体連の試合日を外しても、第 9 節＋予備日 2 日を入れることができ、10 チームのリーグ戦ができることがわかりました。これを踏まえて「東京都ユースサッカーリーグ計画（案）」（1996.3.23）を描き、仲間を集め、その年の 4 月からユースリーグをはじめました。

初年度は 10 チームが参加し、第 1 節が 1996 年 4 月 9 日、筑波大学附属高校特設グラウンド（縦 75m×横 61m）で行われました。ピッチの縦サイズが短いのは、この時、野球のバックネットが壊れて工事中だったため、ゴールラインを前に出したものです。本日参加の高沢さんが、三菱養和の得点者として記録されています。

この時点ではただ「リーグ戦」と言っているだけで、「DUO リーグ」という名称はついていません。この第 1 節の試合後に、今後のリーグの進め方、リーグ名称の検討を兼ねた懇親会が行なわれ、その席で「DUO リーグ」という名前が誕生したようです。

ここまででなにか質問はありますか？　高沢さん、なにか補足はないですか？

おそらく、当時三菱養和はクラブユース同士の試合はしていたと思いますが、高体連の人たちとこのような土のグラウンドでプレーすることはなかったのではないでしょうか？

高沢：そうですね。やはり、クラブと高体連は違うので。あまり意識はしていませんでした。

このリーグは、ユース年代のリーグであって、高体連やクラブユースといった形で分けているわけでなく、志を同じくする者同士でしましょうというスタンスだったので、三菱養和も最初から参加していたのです。

３．JCY 中長期検討委員会（2000.3.1.）「JCY の抱える課題（2000 年度へ向けて）」

その次です。2000 年 4 月 4 日、JCY（日本クラブユースサッカー連盟）緊急理事会での提案です。

この時、「ヴィヴァイオ船橋」の加盟登録に関して、クラブユース連盟としてどのように考えるかを議題とする理事会が緊急で開かれることになったのです。私はこの会議に出席できなかったので、考えをまとめて文章化して提出しました。それがこの文書です。

クラブユース連盟には当時、中長期検討委員会があり、私もメンバーの一人でした。

J リーグが発足し、下部組織を持つことが義務付けられたことで、いずれ J クラブにタレントが集まるだろうと見込まれていました。しかしクラブユース連盟には、地域クラブ、街クラブも加盟しています。さらに、学校自体が地域との連携を模索するようになり、クラブユース連盟はどこまで網羅するべきかについて、中長期的な展望を話しておかなければならないということがありました。福岡

のわかば FC の方が中長期検討委員会の委員長で、何度か集まって話をしています。

2000 年 3 月の時点で、

① 登録がチーム単位

② 学校を基盤としたクラブの受け入れに関して、受け入れるべきである

③ 地域ごとのリーグ戦の開催

との３つの課題を示しました。ヴィヴァイオ船橋については、（チームだけでなく）クラブをしっかり育てる意志があるのならば、JCY はこれを受け入れるべきだ、と主張しました。

一方で、2000～2001 年にかけて、ローカルで始まった DUO リーグを東京都全域に広げるためのアクションを開始していました。基本的な構想、準備の進め方を形にして伝え、2001 年後期から、準備が整った地域からプレリーグを始め、2002 年度は前・後期を通じてプレリーグを実施しました。2003 年度には全都的な「プレ上位（PJ）リーグ」に取り組み、2004 年度より東京都サッカー協会公認のリーグを作る計画でした。議論の場も、最初は高体連の中の任意の組織でしたが、その後、東京都サッカー協会ユースリーグ準備委員会が組織され、そこで準備を進めました。いずれも私は委員長として携わりましたが、2004 年の立ち上げ寸前で、“公教育の壁”に阻まれたという苦い経験があります。

４．サロン 2002 フットサルプロジェクト１『フットサル連盟は必要か？』

「フットサル連盟は必要か」の話ですが、これは 2000 年度に実施したことです。1994 年頃からフットサルが始まり、各都道府県に担当者を置くことになり、東京都サッカー協会でもフットサル委員会を立ち上げました。本格的にフットサルをプレーする人も増えてきました。そこで、フットサルの登録制度が問題になり、フットサル連盟を立ち上げるにあたって、どのような組織にすればいいのか検討してほしいとの依頼を受けました。

当時サロンには、フットサルに関わる会員がたくさんいましたので、サロンのメンバーでプロジェクトを作り、ミーティングを重ねることになりました。冊子『サロン 2002 フットサルプロジェクト１報告書　フットサル連盟は必要か？』の P.29 に「サロン 2002・フットサルプロジェクト１　コア・メンバー」が載っています。今からみても結構「コア」な人ばかりです。コア・メンバーとアドバイザリー・メンバーでディスカッションの場を設け、P.26 の「東京都フットサル連盟　登録制度　相関図（案）」を作成しました。当時の制度では、チーム単位で連盟に登録するスタイルになっていますが、新しい制度では個人登録も可能にする考え方を提案しました。それまでに様々な場面で登録制度に関して提案してきた考え方を絵にしたわけです。

（詳細はサロン 2002 オフィシャルサイト<http://www.salon2002.net>「フットサルプロジェクト」参照）

ところが実際は、提案どおりにはなりませんでした。登録は、フットサル連盟に加盟する際、年度初めにチームと個人が１セットで登録するスタイルで始まり、今も続いています。フットサルの方も、なかなか思い描くようにはなっていないのが現状です。

ここまでが、『「2010 年のサッカー環境」を描く前に考えていたこと』です。

５．質疑応答①

高原：1996.2.11 のシンポジウムの資料に、「リーグ戦を中心にした組織作り」という中で、「１週間の生活サイクルを確立させる。そのために選手はオフを週１日以上必ずとる」というところには、どのようなねらいがあったのでしょうか？

中塚：オーバーワークを阻止するのが目的です。プレーヤーが 365 日練習づけになり、スポーツ障害の問題やメンタルで燃え尽きてしまう問題をなくすために、週１日は必ずオフにするということです。今もそうですが、高校生年代にやるべきこと（サッカー以外の勉強等）に取り組む時間も必要だろうという考え方です。

高原：クラブとしての組織だった練習の制限があり、やりたい人は勝手にやっていいよ、という位置づけの中で、それでも「週１回はオフをとる」ことを設けた根拠は、そうでもしないときっと７日間練習してしまうだろうという予想があったわけですか？

中塚：そうです。やりすぎを抑えよう、というのもありました。

高原：それは、問題なく決まったり、その後も反映されているのですか？

中塚：反映されていません。これはあくまでも「構想」であり、ほとんど反映されていないと思います。最初に書かれている登録制度は、全く変わっていません。練習に関しても、１年 365 日練習している学校の話が、先日もありましたね。

白井：野球に関しては、特待生問題で、週１日休むとする新しい学生野球憲章で守られているのか、という議論がありました。サッカーに関しては、新聞に「優勝したチームは正月しか休んでいない」という記事が載せられたことがあります。その点からいうと、議論がされていない、という問題はあると思います。

中塚：関連の話になるのですが、部員数の多い私立の学校は、全員が一斉に休むのは合理的ではないと思います。誰かしら活動しているが、個々の部員をみると週１回は休んでいるというようにできればいいですね。しかし、それを把握できるのは指導者と本人だけです。指導者が果たしてそこに目を向けているかどうか…。向けていない人が多いでしょうね。

白井：高野連の議論では、生徒を１日でもゆるめると、そこでどんな悪さをするかわからない、だからきちんと監督しなければいけない、という意見が出てきたと聞いています。

参加者：この時には、クラブチームから１週間の活動を制限するということに関して異論は出なかったのですか？

中塚：残念ながら、この案で深い議論にはなりませんでした。サッカー医・科学研究会は 100～200 人集まる大規模な会なのですが、演者に対して指定発言者が発言し、それで終わりなのです。クラブの人がこれを聞いてどのように感じたか、リサーチはできていません。

藤田：私がフットサルを教えていた小学生が養和調布のジュニアユースに入り、そこで休みの日には他のクラブで活動をしてはいけないと言われ、フットサルクラブを辞めました。つまり、サッカーをしながらフットサルをするな、ということです。それを聞くと、主旨が伝わってないように思います。現場ではどのように考えているのでしょうか？

中塚：養和でいうと、小学生のスクールで月・木と火・金のコースがあります。そこは養和で登録しているのではなく、養和のスクール以外に、地元のクラブで登録しているスタイルです。週末は地元のクラブに登録選手してプレーすることはできますよね。

藤田：中学生になると、他のフットサルクラブへの登録は禁止しているそうです。

中塚：それはおそらく、養和で選手登録した人の話ですね。養和も以前は、中学生年代で、選手登録しない週 1 回のコースを開いていました。その時点では、サッカーができる環境がない子どものためにこのようなコースを開いていたのですが、中学生年代のクラブチームも増え、養和がそこまでする必要はない、ということで終了したと聞きました。それ以降は、中学生より上の年代では、登録選手しか養和にいなくなり、その選手は養和以外では活動してはいけない、という話になったようですね。おそらくオーバーワークの防止ということを考えているのだろうと思います。

参加者：私の息子が小学生の時に、遊び感覚で民間のクラブに入っていて登録もしていました。友達に誘われて地元の学校へ行ったときに、開口一番「登録しているのだったら、お前はここではできない」と言われました。それで、1、2 年行かずに、その後入ったという経緯があるのですが、その時にわずか小学 3, 4 年生で登録というシステムにしばられているというのを感じました。

中塚：チームとセット、年度単位で登録、ですね。

福西：少し流れとは違うかもしれないのですが、登録の話をするような場面には、基本的に高校生年代、ユース年代に携わっている人が多く集まるのでしょうか？

中塚：私が関わっているところでは、ユース年代の人が多いですね。

福西：登録の話で U-12 の方々と話をするときに、サッカー協会でものごとを決める場に、U-12 に携わる人が少ないのではないか、という話題がよく上がります。登録の話でも、U-12 より下の年代で、練習しているチームとは違うチームに登録するということは、町クラブ同士では絶対にうまくいかないです。現在、U-12 でもリーグ戦が進められてきており、奈良県では来年度から 8 人制のリーグ戦がスタートします。 8 人制に変わる中で、キーパーはビブスでいい、審判は一人でいい、という話があり、運営面では楽なのですが、実際小学生レベルで開催していることを少し軽視しているのではないか、という意見がよく出ます。せっかく公式戦をしているのに、そういうのでいい、となると…、との意見です。指導する中身は、小学生なので「好きになる」ことが一番だと思いますが、そのあたりは実際どうなのでしょうか。もっと、このような場にこの年代を指導されている方が入ってもらえないか、ということを感じています。

中塚：オフィシャル化に伴う問題なのだと思いますが、オフィシャル化すると、きちんとしたルールでしなければならないし、きちんとすることで子どもたちの「やる気」も生まれるかもしれない。でも、きちんとしすぎてがんじがらめになっている部分もあります。そのあたりの折り合いは、ユースリーグの準備時にも経験しましたし、いま、U-18 フットサルリーグの中でも起きています。

藤田：先ほどの U-12 の登録の問題で、東京都以外のことはよく知らないのですが、東京都の学校サッカーチームでは、外のクラブに所属していても、学校のチームの練習に参加させています。東京では、小学生で本格的にサッカーをしている子は外部のクラブに入ります。コーチをしている小学校教員コーチ、父兄ボランティアコーチとしては「外のクラブに所属しているから学校のチーム練習には参加させない」というような、仲間外れを助長するようなことはしたくありません。そのような子どもたちのために指導者同士が集まり、協会主催ではない大会を企画して、協会登録とは関係なくゲームに参加できるようにしています。東京の小学校レベルではこのようなケアを始めています。

参加者：それは、人口も関係あるのでしょうね。人口の少ない地域ではチームは一つしかなく、それではゲームはできません。死活問題です。

中塚：少し関係してくるので、話を進めたいと思います。「2010 年のサッカー環境とは」というところです。

Ⅱ．「2010 年のサッカー環境」とは…

１. JCY 理事会(2001.10.23.)「2010 年のサッカー環境構想－ユース年代を中心に(第 1 案)」

資料の続きの「2010 年のサッカー環境構想―ユース年代を中心に（第 1 案）」のところです。

これも、ずいぶん昔の日本クラブユースサッカー連盟理事会の資料で、2001 年の 10 月に発表したものです。まえがきのところに、中・長期検討委員会の話で、「10 年後のクラブユース連盟のあり方についてたたき台を作成せよ」と依頼を受け、第 1 案を提示したと書いてあります。第 2 案以降は作成されなかったので、この第 1 案が最初で最後です。

「なぜ 2010 年か？」というと、2000 年に「スポーツ振興基本計画」が示されました。この背景には、東京オリンピック時に出された「スポーツ振興法」の中で、基本計画を作成することとなっていたにもかかわらず、財源の問題等があって、つくられないまま何十年も経過し、それがようやく toto という財源を得て 2000 年に完成したという経緯があります。そこでは、10 年後の 2010 年には、中学校区単位で総合型のクラブを作るという設定があり、2010 年が一つの目標年になっていました。これを踏まえて、「2010 年のサッカー環境」という言い方をしていたのです。

１）2010 年のイベントのとらえ方

まず、「2010 年のイベントのとらえ方」です。1996 年当時と全く同じなのですが、「週末にゲームを行う“リーグ戦”を柱にしながら、トーナメントの“カップ戦”と単発的な“フェスティバル”、及びクラブ間の“定期戦”で構成される」というイメージです。

“リーグ戦”は、区市町村から 9 地域までレベルごとで行い、ある一定の条件を満たすチームが参加することができます。一定の条件とは、公認クラブに属すること等です。ここでの公認クラブとは、協会が把握するクラブであることが前提となっています。

“リーグ戦”がベースなのですが、“カップ戦”（ノックアウト方式）も行います。例えば夏のカップ戦は各連盟主催で、高体連のインターハイ予選、クラブユース予選などはノックアウト方式で行います。FA が後援する形です。冬のカップ戦は JFA 主催で、例えばリーグ未加盟のチームであってもエントリーできるようにイメージしました。

それ以外に単発で“フェスティバル”を各クラブ・地域連盟・民間主催で行い、その中には JCY が後援することもあります。それとは別に、“定期戦”文化というのもあえてここに取り込みました。クラブ間の定期戦、例えば、日本最古の YC&AC 対 KR&AC（横浜外人クラブ vs 神戸外人クラブ）の定期戦のようなものが、日本の色々な地域で展開していけばクラブの歴史･伝統になっていくわけです。

筑波大学附属高校は、戦後すぐに始まった湘南高校とのサッカー定期戦が 3 月中旬にあります。この試合はシーズンはじまりの重要な試合で、現役、OB を含めた対抗戦で、試合終了後は両チームのプレーヤーが集まって食事会をしながら交流をします。両校の生徒達は、高校を卒業した後、大学や就職先で出会うことがあります。同志の仲間で定期戦をすることはいいことだと思います。これをクラブ主導で進めていってはどうだろうか、というイメージです。

フットサルも同様に、リーグ、カップ、フェスティバル、定期戦があるというイメージです。

２）2010 年のシーズンのとらえ方

「2010 年のシーズンのとらえ方」は、1996 年に示したものより進化しており、レベル別のリーグがあり、その合間にカップ戦やフェスティバルがある、というイメージです。

「8 月のフットサル大会は、11 人制のサッカーに取り組まない者を主に対象とする」というのは、サッカーの大会が多い 8 月にあえてフットサル大会をもってきて、サッカーをしない生徒が 8 月のフットサル大会に出るようなイメージです。もう一方で、1・2 月にもユース年代のフットサル大会を実施します。ここはサッカーをしている生徒もチームを作ってフットサル大会に出ることができます。

実はこの考えをベースにしながら、東京都サッカー協会のフットサル委員会主催で、夏と冬のユース（U-18）フットサル大会を始めて今年で 10 年になります。来年 2 月 5 日に「10 周年記念シンポジウム」を実施する予定です。

３）2010 年のメンバーのとらえ方

「2010 年のメンバーのとらえ方」では、「メンバーシップ」と「エントリー」を整理することが必要であるとしています。これについては、『フットサル連盟は必要か？』の資料から引用しています。

「連盟の構成員－加盟団体はクラブ、会員は個人、大会参加はチーム単位で」というところを整理すれば色々な問題が解決します。例えば、定期戦に関してですが、筑附高と湘南高校との定期戦は、協会の登録は全く関係ありません。筑附高にも杉並 FC や横河 FC でプレーしている生徒がいますが、彼らは学校でナショナルチームを編成して湘南との定期戦に出場できるはずです。リーグ戦は A チーム、B チームがそれぞれのメンバーを構成し、カップ戦では連合軍を構成して出場します。つまり、競技会への参加単位となるチームは、クラブが、その時々の競技会レギュレーションに従ってチームを編成すればよい。競技会の際に、個人とチームをワンセットで把握すればいい。よって、１年間を通してチームと個人をくっつけておく必要は全くないという考え方です。

「クラブのタイプ」ですが、ここでいう“クラブ”には 4 つのタイプがあります。

① J クラブ
② J 以外の地域クラブ
③ 学校運動部の連合組織
④ 単一の学校運動部　（④以外は多年代にまたがる団体）

これまでは、JCY が①②をカバーし、中・高体連が④をカバーしていましたが、③のようなタイプ（学校運動部の連合組織）の団体も今後出てくる可能性があります。このタイプは、今後、日本型モデルとして期待できるのではないか、ということです。そこで③を、JCY にも中・高体連にも双方に加盟させる形を取り育てていきたいというアイデアです。残念ながら未だに採用されていませんが。

クラブのメンバーである“会員”は、例えば以下のようなタイプが考えられます。

① アスリート（FA 公認競技会に参加する選手）
② プレーヤー（FA 公認競技会には参加しないが日常的にプレーする会員）
③ サポーター（プレーはしないが金銭面や労力の提供などでクラブを支える会員。賛助会員）
④ スタッフ（有給職員及びボランティア）

特に③は、スポンサー企業のような団体としての入会もあるでしょう。“会員”は、会費を払ってそれに見合うだけのサービスを享受するとともに、様々な形でクラブをささえる存在です。そして、クラブ会員の中で、U-15 と U-18 に関わる者が JCY の会員となると考える、というアイデアです。

エントリーは“チーム”単位で、というのは、先ほど述べたとおりです。「競技会は予選と本大会を別物と考えることもできる。その場合、予選敗退した“チーム”の選手を移籍させて本大会に臨むこ

とも可能。“同一クラブ内の移籍”（チーム移動）はクラブ内の問題としてよいが（本当に良いか検討が必要)、“クラブ間の移籍”をともなう場合、“移籍規定の範囲内で”ということになる。」

例えば、予選で敗退したが、そのチームにはタレントがおり、是非ひとつ上のステージでプレーをさせてやりたいというときに、本大会でチームを再編成し、その選手を含め再編成されたチームが参加できるような配慮をしてもいいのではないか、という考え方です。リーグ戦も同じで、筑附高は現在 DUO リーグ２部ですが、もしそこにタレントがいるとするならば、2 部リーグではもったいない。たとえば 1 部リーグに所属する他クラブのチームに移籍させてプレーさせるのが望ましいのではないかということです。定期戦やカップ戦では、競技会のレギュレーションに沿って、このプレーヤーも一緒にプレーする、というような考え方でできないだろうか、ということです。

４）2010 年のクラブユース連盟

「2010 年のクラブユース連盟」への加盟のメリットは何かというと、ここに色々挙げていますが、FA 主導で各都道府県・各地域にリーグ戦が整備されていくと、実はクラブユース連盟は必要なくなるのではないかという疑問が当初からありました。協会とリーグがあれば問題はありません。学校以外のクラブが連盟を作って、FA リーグとは別に何かをする必要があるのかということです。むしろ現行のクラブユース連盟は、FA リーグの実現に力を注ぎ、完成した暁には解散するぐらいの心構えがあってもいいのではないか、という話もしていました。

ここまでが、2010 年のサッカー環境構想第 1 案についての話です。

２．「JFA と J リーグの協調・協力（2003.10.23.）」に描かれた将来像

１）「カウンセリンググループ」の発足（2003.6.17.メールより）

「2010 年のサッカー環境」を考えていたのは、2002 年 FIFA ワールドカップの前の話です。

2002 年のワールドカップを終え、日本サッカー協会の会長が川淵キャプテンに変わり、CHQ が発足しました。川淵キャプテンが様々な改革を打ち出そうとしている状況の中、J リーグの中でも育成が重要視されるようになり、先日サロンで話をしてくださった山下則之さんがチーフとなり、J リーグ・アカデミーが始まりました。私はそのアドバイザリースタッフとなっていました。

2003 年に山下さんから声がかかり、JFA と J リーグがそれぞれどこを担っていくべきかについて、将来的なビジョンを作っていこうという話になりました。“作戦会議”を、私の周りにいる人たちでやってもらえないかという依頼です。私の周りにいる人たちとなるとサロンのメンバーとなりますが、隠密の“作戦会議”ですので、サロンの“公認プロジェクト”という言い方はできませんでした。今日、初めて紹介します。

2003.6.17 付けの資料（省略）は、筑波大学の仲澤さんと鈴木さん、宇都宮さんに送ったメールです。これらの人に入っていただき、山下さんを加えたメンバーで検討を始めることになりました。「J リーグアカデミー作戦会議（仮称)」です。

話の発端は 2 つあるようです。

一つは JFA 技術委員会。山下さんも委員だったのですが、この委員会は、代表強化からありとあらゆることを請け負っているが、どうしても「強化」に偏る傾向がある。その委員会で山下氏が、地域からの育成環境作りの提案をされたところ、「その考え方がわかるような“絵”を描いて欲しい」となったようです。これは川淵キャプテンからの依頼でもあります（他の人にも“絵を描け”といわれていたのかもしれませんが)。

注）山下氏から次の指摘があった。

文中の「その委員会で山下氏が、地域からの育成環境作りの提案をされたところ」は技術委員会ではなく、「多分 CHQ との打ち合わせ」だと思います。川淵キャプテンから指示されたと思い

ますが、記録がないので定かではありません。このころは、キャプテンへ、J リーグ・アカデミーの進捗状況を定期的に報告していました。

もう一つは JFA の CHQ（キャプテンズヘッドクォーターズ）。ここではいくつかのミッションを掲げ、それらを「のんびりと」検討するのではなく、2 年くらいの間に「はじめの一歩」を踏み出すことが課せられていました。そして、ミッションのうちのいくつかは、J リーグ・アカデミーが 10 年単位で考え、進めていこうとしていた部分と重なっています。

2003 年の 9 月から JFA ハウスが文京区に移転し、J リーグも同居します。今まで以上に両者は連携し、また住み分けなくてはならないと考えます。しかしながら、JFA と J リーグがそれぞれどこの部分を、どう担っていくのか、特に「育成」や「地域」に関わる分野については明確ではありません。

そこで、“絵”を描いてほしいとなったのです。

２）議論の経過と内容

2003.6.20 に 1 回目の作戦会議が開かれました。その時のテーマが「JFA と J リーグ　その他の関係団体の位置づけ」です。

どんな“絵”を描くか。漠然とですが、最初に考えたことをラフな絵にしました（ここでは略）。

（１）JFA と J リーグ、その他の関連団体の位置づけ図
　　JFA がサッカー界“全体”をカバーし、J リーグが地域の“モデルケース”となるイメージ

（２）サッカー人口を示す図
　　サッカーファミリーはどこまでをいうのか
　　どんな人がサッカーに関わっているのか

（３）プレーヤーの構成
　　サッカーファミリーの中で「プレーヤー」を年齢とパフォーマンスレベルの関係で描きたい
　　サッカータレントの描写にもなる
　　サッカー以外のスポーツとの関係も含めたい

（４）クラブとはどういうものなのか示したい

（５）日常的な活動モデル

プレーヤーをどのように描くか。皆さんに回覧させてもらっている、冊子『サッカータレントの発掘と育成－資質と環境を考える』（JFA 科学研究グループ）でも描かれているものです。年齢に応じてパフォーマンスレベルは上がっていき、ある一定以上に達した人が、インターナショナルレベル、J リーグレベルに達し、それが年齢と共に低下していきます。その人たちはどこの層から出てくるのかということを示したものが②の図です（略）。低年齢ほどあらゆるプレーヤーに可能性がある、遅咲きの子もこの絵のどこに落とし込んでいくかを考えます。

③の図は、例えば今はラグビーをやっているが本当はサッカーに向いている人、サッカーをしているけど野球の方がいい人、というパターンがあると思うので、種目の軸を設けるとプレーヤーというのがもっと見えてくると思います（②③は、図「多種目間タレントの位置づけ」に反映）。

「クラブの概念・アソシエーションの概念」は、スポーツ社会学のテキストにはよく出てきますが、依然としてチームとクラブを混同している人が多いので、これを整理してわかりやすく示します。

「日常的な活動モデル」は、JFA 機関誌サッカーの連載「ユース年代のサッカーはいま！」で示したものですが、サッカータレントの A 君は年間を通してサッカーのリーグに参加している、スポーツ好きの B 君は春のシーズンはバスケットボールのリーグに参加し、秋のシーズンはサッカーに関わっているというマルチスポーツライフを受け入れようとするものです。例えば、今はサッカーをやっている人は 1 年中サッカーに関わりますが、シーズンごとに、取り組むスポーツ種目を変えるような仕

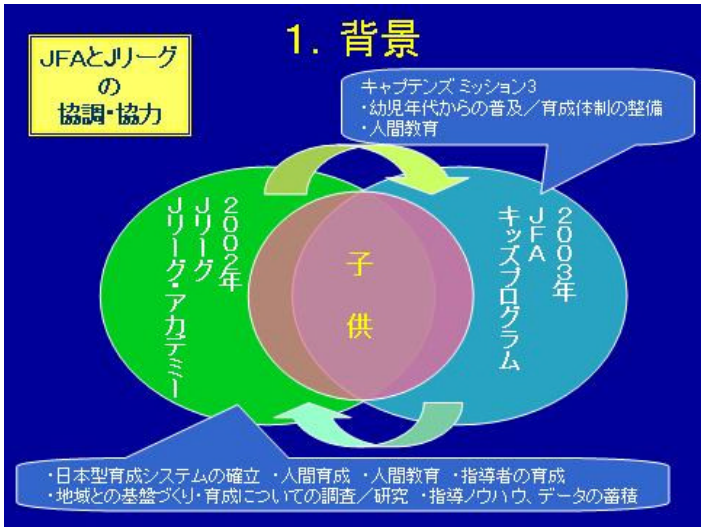
組みにできないだろうかということです。

「衛星型サッカー環境」は、底辺は近場、上のレベルになるほどより広域を移動するというイメージを描いたものです。

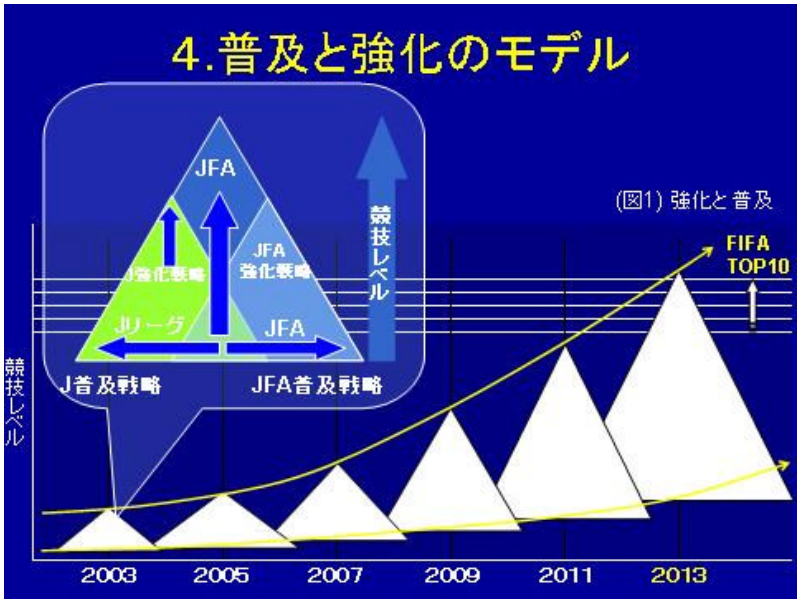
３）アウトプットとしての「JFA と J リーグの協調・協力（2003.10.23.）」と「JFA2005 年宣言」

これらを用いながら何度か議論し、2003.10 にまとめたスライドをご覧いただきます。

まず、背景には子どもがいます。2002 年に J リーグアカデミーが始まり、日本型育成システムの確立、というのが始まります。これから 1 年遅れて、JFA でもユニクロの協賛でキッズプログラムが始まります。J リーグと JFA で似たようなプロジェクトが始まりますが、お互い連携を取りながら進めていくことになります。地域・環境作りでは「普及」と「強化」のバランス、組織で諸団体・機関との協調が課題として考えられました。



JFA と J リーグはそれぞれ「強み」を持っており、双方の役割はそれぞれの機能的・役割的な特徴から捉えるべきであることが現状として分析されました。JFA の強みは組織力、公的資金を使いながらの拠点等の施設整備、地域のスポーツ団体、地区体協内における組織的連携の構築が挙げられ、J リーグの方は、個人を対象とした普及ノウハウ、メディア、ビジネス、民間活力、ソフト開発などといった強みがあります。



J リーグと JFA の「普及と強化のモデル」に年号をいれてみました。少しずつ底辺を広げ、頂点を

高めることを図示しました。2003 年の発案なので、10 年後の 2013 年が最後になっています。
事業のモデルとして、2003 年当時は J リーグ（J クラブ）と JFA が別になっていましたが、これを JFA が全体を統括することにより、J クラブ・J リーグが一つのモデルを作り、都道府県協会と協力しながら進めていけるようにしたいと考えていました。具体的にはそれぞれの年代に応じて行っている事業を住み分けしつつ、連携できる部分は連携するということです。

「普及と強化の事業整理（１）－育成・発掘・強化事業」では、結局目指すものは同じであることを確認しました。例を以下に挙げます。

例１：トレセン活動と J リーグ・アカデミー

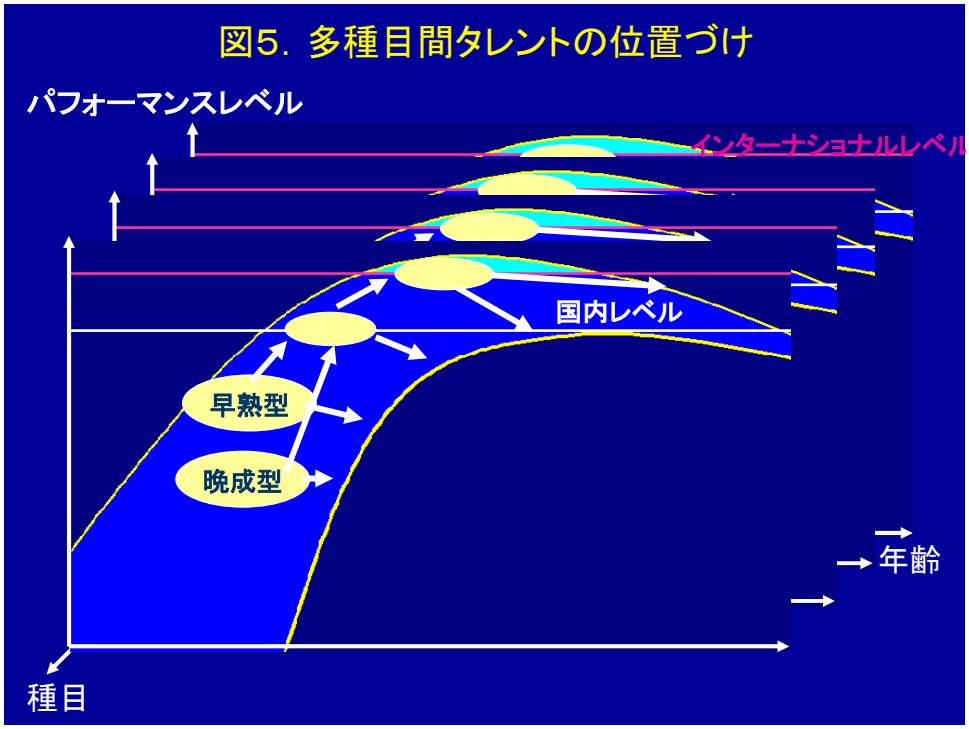
- J クラブに属するタレントをトレセン活動に積極的に参加させる
- J クラブのある地域ではトレセン活動を J クラブがリードしていく
- J クラブが独自のノウハウを開発することも必要→都道府県の FA の財産に

これらは少しずつ実現しています。

例２：JFA キッズプログラムと J リーグアカデミー

これに関しての結論は出ていませんが、どのような協力・連携が必要か、という問題提起です。

「タレントの位置づけ」は、縦軸にパフォーマンスレベル、横軸に年齢をとっています。タレントとは、インターナショナルレベル、J リーグレベルともこの範囲内にいると位置づけます。例えば、年齢がある程度上でパフォーマンスレベルの低い選手は、いきなりインターナショナルレベルにはならないので、この帯の範囲内におさまっている選手が「タレント」であると考えます。低年齢であればあるほど可能性は高く、高年齢ほど可能性は低くなってくるというイメージです。
早熟型は最初から目立っており、小さいときから経験も積んでいけるのでどんどん上手になっていきます。しかし晩成型は、同じ年代からみると鈍くさいけど、経験を積むことによって上に引っ張り上げられる可能性もあります。だからクラブに１チームではなく、クラブの全員が試合に出て経験を積む必要があるということをここでは言いたいのです。

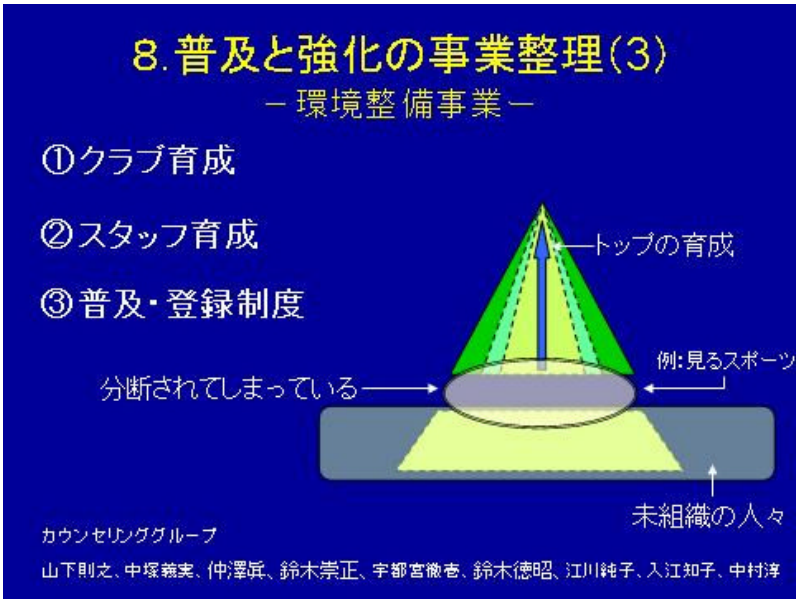


ここで種目という軸を設けることで、他の種目と行き来できることをイメージしています。この図は、現在サッカー協会の A 級ライセンスの講習会で実際に用いられています。

「競技会事業の整理が必要」のスライドでは、次のように整理することを提案しました。「2010 年のサッカー環境」で提示した考え方です。

① リーグ戦
　FA 主催（プリンスリーグ／これからリーグ→最初は JFA はこのような呼び方をしていた）
② カップ戦
③ フェスティバル
④ 定期戦

「普及と強化の事業整理（３）」ではピラミッド構造で描いていますが、本当は未組織の人々が大勢おり、この人々をどのようにしてつないでいくかが重要です。「見るスポーツ」が、これらをつなぐキーファクターになってくるのではないかということです。これは仲澤さんの専門分野です。



これらをより具体化したものが、「サッカー協会と J リーグの対比表」です。それぞれの強みを書きました。

2003.10.22.

サッカー協会とJリーグの対比表（概要）

	サッカー協会		Jリーグ・Jクラブ	
	JFA	都道府県FA	Jリーグ	Jクラブ
位置づけ	日本サッカーの統括団体 FIFA公認	都道府県サッカーの統括団体	Jクラブの連合組織 JFA公認	Jリーグの加盟団体
誕　生	競技会の主催団体として誕生（1910）	JFAの傘下団体として組織	リーグ組織としてチームが集まり誕生（1991）	企業・行政・市民など様々な背景から誕生
基本理念	平等・公平 広範囲に、薄いサービス	平等・公平 限定的に（都道府県内）、薄いサービス	経営／新規ニーズの開拓 広範囲に、濃いサービス	経営／新規ニーズの開拓 限定的に（ホームタウン内）、濃いサービス
サービスの対象者	加盟“チーム”と登録選手 全国の一般市民	加盟“チーム”と登録選手 都道府県の一般市民	Jクラブ 全国の一般市民	クラブのメンバー ホームタウンの一般市民
情報提供の範囲	全国の一般市民	都道府県の一般市民	全国の一般市民	ホームタウンの一般市民
指揮系統	トップダウン	トップダウン JFAに対してはボトムアップ	ボトムアップ（?） Jクラブに対してはトップダウン	ボトムアップ（?）
運　営	専従職員＞ボランティア	専従職員＜ボランティア	プロによる運営	プロによる運営
財　源	加盟費（“チーム”）、会費（個人） スポンサー収入 事業収入	加盟費（“チーム”）、会費（個人） スポンサー収入 事業収入	加盟費（Jクラブ） スポンサー収入 事業収入	会費（個人） スポンサー収入 事業収入
他団体との関係	日体協・JOCとの連携 他競技団体との全国的な連携 全国少年団との連携 全国中・高体連との連携 その他の連盟との全国的な連携 全ての都道府県FAとの連携	都道府県体協との連携 他競技団体との都道府県内における連携 都道府県少年団との連携 都道府県中・高体連との連携 その他の連盟との都道府県内における連携 近隣都道府県FAとの連携	日体協・JOCとの連携 他競技団体との全国的な連携 Jクラブ相互の連絡調整	市町村体協との連携 他競技団体とのホームタウンにおける連携 Jクラブ相互の連絡調整
事　業	別紙参照		別紙参照	

今日は、その次の資料をもとに、残り時間を使って議論をしたいと思います。

育成・発掘・強化の事業、競技会の事業、そして最後に、クラブ育成、スタッフ養成、普及活動と登録制度に分けて整理しました。

2003 年に作成した資料なので、2003 年時点の状況、2006 年ドイツワールドカップ時のイメージ、2010 年のイメージ、そして 2021 年。これは日本サッカー協会の創立 100 周年なので、その年のイメ

ージ。最後に 2050 年。ここでは「世界一のサッカー大国にふさわしい環境に」をイメージしています。

2050 年を最終目標に挙げたことに深い理由はありませんが、このような考え方を表にしてみました。2050 年には「世界一のサッカー大国」としています。

表２．育成・発掘・強化事業

2050年	世界一のサッカー大国にふさわしい環境									
2021年	全国の幼稚園でカリキュラムに取り入れられる		トレセン活動拠点の充実		トレセン活動拠点の充実		トレセン活動拠点の充実		レベル別拠点の整備	
	すべての県FAで展開	先行事例としてのJ育成センター	都道府県トレセンの整備（Jstep級）	県によってはJクラブがトレセン拠点に	県トレセンの整備（J step級） 県内のタレントの才能教育（単発）	県によってはJクラブがトレセン拠点に 県内のタレントの才能教育（寮生活）	県トレセンの整備（J step級） 県内のタレントの才能教育（単発）	県によってはJクラブがトレセン拠点に 県内外のタレントの才能教育（寮生活）	ナショナルトレセン9ヶ所（9地域トレセンを兼ねる） 県トレセン47ヶ所（J step級）	県によってはJクラブがトレセン拠点に 県内のタレントの才能教育（寮生活）
2010年	47都道府県でキッズプログラム開始		トレセン活動拠点の整備		トレセン活動拠点の整備		トレセン活動拠点の整備		自前の拠点の確保	
	すべての県FAで展開	先行事例としてのJ育成センター	9地域トレセンの整備（Jstep級）	県によってはJクラブがトレセン拠点に	9地域トレセンの整備（Jstep級） U-16国体県選抜チームへ向けての県FAの強化策	県によってはJクラブがトレセン拠点に	9地域トレセンの整備（Jstep級） U-17世界大会へ向けてのJFAの強化策	県によってはJクラブがトレセン拠点に	レベル別拠点の確保 週1回レベル別トレセン／それ以外は各クラブで活動	独自のスカウトシステム（県内外・海外からも）
2006年	より多くのクラブor県FAが巡回指導に関わる		トレセン制度の充実		トレセン制度の充実		トレセン制度の充実		拠点の開拓	
	JFAキッズプログラム（モデルFAの増加）	J育成センターのノウハウを他クラブへも伝授	底辺からのトレセン活動→エリートプログラムへ タレント発掘・育成の指針	JFA、県FAの活動への協力 地域にあったクラブ固有の育成活動	底辺からのトレセン活動→エリートプログラムへ タレント発掘・育成の指針	JFA、県FAの活動への協力 地域にあったクラブ固有の育成活動	底辺からのトレセン活動→エリートプログラムへ タレント発掘・育成の指針	JFA、県FAの活動への協力 地域にあったクラブ固有の育成活動	県トレセン専用拠点の確保（Jクラブとの協力） 県内ブロックトレセンは学校・公共施設の活用等で拠点確保	Jクラブ練習環境の整備 Jクラブ・ブランチを拠点に
2003年	JFAキッズプログラム（モデルFAのみ）	J育成センター巡回指導	トレセン・エリートプログラム	J育成センター	トレセン・エリートプログラム	J育成センター	トレセン・エリートプログラム	J育成センター	ナショナルトレセン2ヶ所	J育成センター
	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ
	U－6／育成・発掘・強化		U－12／育成・発掘・強化		U－15／育成・発掘・強化		U－18／育成・発掘・強化		育成・発掘・強化（トレセン）活動拠点	

表３．競技会事業

2050年	世界一のサッカー大国にふさわしい環境							
2021年	全国あらゆる幼稚園でカリキュラムに取り入れる		多様な参加形態ークラブがベース・学校大会もあり		多様な参加形態ークラブがベース・学校大会もあり		多様な参加形態ークラブがベース・学校大会もあり	
	JFAキッズプログラム	Jクラブ主催のフェスティバル	U-12のトップは県ブロック単位、U-10以下は市町村単位のリーグ戦 フットサル大会（単発）の整備 リーグ運営ガイドブック	県によってはリーグ運営の拠点 サッカーもフットサルも行う Jクラブ主催大会など、様々なフェスティバル	11人制リーグ戦（トップは県単位→9地域大会あり） フットサル大会の整備 リーグ運営ガイドブック 中学校大会への「学校ナショナルチーム」参加（Jクラブの選手も参加可＝登録制度の見直し）	県によってはリーグ運営の拠点 サッカーもフットサルも行う 中体連・JCY・Jリーグそれぞれのカップ戦	11人制リーグ戦（トップは9地域単位） フットサル大会の整備 リーグ運営ガイドブック 高校選手権への「学校ナショナルチーム」参加（Jクラブの選手も参加可＝登録制度の見直し）	県によってはリーグ運営の拠点 フットサル部門ユースチームの立ち上げ 高体連・JCY・Jリーグそれぞれのカップ戦
2010年	47都道府県でキッズプログラム開始		リーグ戦とカップ戦の整備		リーグ戦とカップ戦の整備		リーグ戦とカップ戦の整備	
	JFAキッズプログラム	Jクラブ主催のフェスティバル	U-12のトップは県ブロック単位、U-10以下は市町村単位のリーグ戦 フットサル大会（単発）の整備 リーグ運営ガイドブック	県によってはリーグ運営の拠点 サッカーもフットサルも行う Jクラブ主催大会など、様々なフェスティバル	11人制リーグ戦（トップは県単位→9地域大会あり） フットサル大会の整備 リーグ運営ガイドブック 中学校大会への「学校ナショナルチーム」参加（Jクラブの選手も参加可＝登録制度の見直し）	県によってはリーグ運営の拠点 サッカーもフットサルも行う 中体連・JCY・Jリーグそれぞれのカップ戦	11人制リーグ戦（トップは9地域単位） フットサル大会の整備 リーグ運営ガイドブック 高校選手権への「学校ナショナルチーム」参加（Jクラブの選手も参加可＝登録制度の見直し）	県によってはリーグ運営の拠点 フットサル部門ユースチームの立ち上げ 高体連・JCY・Jリーグそれぞれのカップ戦
2006年	より多くのクラブor県FAが巡回指導に関わる		県内ブロックリーグの開催		レベル別県リーグの開催		レベル別県リーグの開催	
	JFAキッズプログラム	Jクラブ主催のフェスティバル	U-12は11人制、U-10以下は8人制のリーグ戦（トップは県内のブロック単位） フットサルの振興 リーグ運営ガイドブック	U-12、U-10、U-8リーグへの参加 大会参加 Jクラブ主催大会など、様々なフェスティバル	11人制リーグ戦（トップは県単位） フットサル大会の整備 リーグ運営ガイドブック	U-16、U-14リーグへの参加 大会参加 中体連・JCY・Jリーグそれぞれのカップ戦	11人制リーグ戦（トップは9地域単位） フットサル大会の整備 リーグ運営ガイドブック	U-18、U-16リーグへの参加 大会参加 高体連・JCY・Jリーグそれぞれのカップ戦
2003年	JFAキッズプログラム	J育成センター巡回指導	全国大会	J育成センター	全国大会	J独自には大会なし／中体連・JCY大会	プリンスリーグ／高円宮杯	Jユース選手権／（高体連・JCY大会）
	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ
	U－6／競技会		U－12／競技会		U－15／競技会		U－18／競技会	

表４．環境整備事業

2050年	世界一のサッカー大国にふさわしい環境								
							JFA公認クラブの拡大（2万クラブ）／JFA会員2000万人（国民の2割）		
							国家事業としての2050年ワールドカップ		
2021年	JFA公認クラブ			JFA公認スタッフ認定制度の完全実施			JFA公認クラブの拡大／多様な会員／JFA会員1000万人		
		「JFA公認」クラブの充実・発展	ビッグクラブとミドル・スモールクラブの共存モデル提示		「JFA公認」スタッフの養成と認定	JFA公認クラブは公認スタッフを一定数保有する（Jクラブがモデル）	「スポーツ省」ができている		
2010年	JFA公認クラブの拡大			JFA公認スタッフ認定制度の完全実施			JFA公認クラブの拡大／多様な会員／JFA会員200万人		
	中学校区をベースにした10,000ヶ所の総合型地域スポーツクラブ	全国に10,000ヶ所の「JFA公認」クラブ（中学校区がベース）	ビッグクラブとミドル・スモールクラブの共存モデル提示		「JFA公認」スタッフの養成と認定	JFA公認クラブは公認スタッフを一定数保有する（Jクラブがモデル）	サッカー／スポーツ界から政界・財界へ進出する者が現れる	個人会員オンライン化完全実施（会員相互のネットワーク）	
2006年	JFA公認クラブの拡大 クラブ単位での加盟制度開始（チーム登録は大会ごと）			JFA公認スタッフ認定制度			JFA公認クラブの拡大 クラブ単位での加盟制度開始（チーム登録は大会ごと）		
		公認クラブの拡大（クラブ申請制度の一層の浸透） JFA公認クラブ・ガイドブック	地域の事情にあったクラブ運営のモデル的実践 クラブ運営ノウハウの公開		「JFA公認」スタッフ認定制度	JFA公認クラブによる講習会の開催		クラブ単位で加盟／個人会員制度実施／チーム登録は大会ごと 会員種別は①アスリート、②プレーヤー、③スタッフ、④サポーター	
2003年	総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業／スポーツ振興投票／スポーツ振興基金等	JFAクラブ申請制度	「クラブ」のモデルづくり	ドクター、トレーナー及びマネージャー・コーチ等の認定	マネージャー、コーチ、レフェリーの養成講習会	運営スタッフは現場で育成		チーム単位の年間登録／個人はチームとセット／フットサル個人登録開始	
	国レベル	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	国レベル	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ	国レベル	JFA／県FA	Jリーグ／Jクラブ
	クラブ育成			スタッフ養成			普及活動（登録制度）		

ここでいう「スタッフ」は次のように区分される
①コーチ（「ピッチの中」のリーダー）
②マネージャー（「ピッチの外」のリーダー）
③レフェリー
④運営スタッフ
⑤医科学スタッフ（ドクター・トレーナー・マッサー・栄養士・科学者…）
※有給と無給／フルタイムとパートタイムがいる

ここでいう「会員」は次のように区分される
①アスリート…JFA公認競技会及びトレセン活動へも参加する競技者
②プレーヤー…県FA主催大会まで参加。トレセン等には参加せず
③スタッフ…左記のスタッフ
④サポーター…各クラブや代表チームのサポーター、賛助会員（個人・団体）
※会費は年齢ごとの基本会費に種別ごとの係数をかける。例えば、基本会費（U-12は500円。U-15は800円。U-18は1000円。O-18は2000円）×１（プレーヤーとサポーター）or2（アスリートとスタッフ）
※各事業ごとの参加費は別に定める（参加者による受益者負担が原則）

普及活動（登録制度）は、国レベル・県レベル・J リーグとなっています。2006 年段階では、JFA 公認クラブの拡大、クラブ単位での加盟制度開始（チーム登録は大会ごと）をこの年から始めることを提案しています。そして 2010 年には、JFA 公認クラブが拡大し、アスリートだけではなく多様な人々が会員になり、JFA の会員は 200 万人になっていることをイメージしました。これが今年（2010 年）にあたります。そして 2021 年には JFA 公認クラブが拡大し、会員も多様化し、JFA 会員は 1000 万人となり、2050 年には国民の 2 割が JFA の会員になっているとしています。そして国家事業としての 2050 年ワールドカップで優勝することを 2003 年にうたいました。

実はメンバーに、CHQ のリーダーであった鈴木徳昭さんも途中から入ってきて、川淵さんと密に連絡を取り合っていました。CHQ として将来図を示しながらスローガンとなるものはないかと鈴木さん自身も考えており、ここでの提案が形を変えて「IFA2005 年宣言」になります。2005 年宣言には、2005 年、2015 年、2050 年という数字が示されていますが、それはこの資料が基になっているのです。

この案では、2050 年には登録人口 2,000 万人としていますが、2005 年宣言では半減して 1,000 万人（国民の 1 割）という数字になっています。後に鈴木さんに会ったときに、「半減しましたね」と言ったら、「あれっ、2,000 万人でしたっけ!?」と笑ってましたが…。

このような形で、サロンの“裏プロジェクト”が“JFA2005 年宣言”につながっています。

いままであまり表に出せなかったサロンの秘密プロジェクトなのですが、サッカー界にとって大きなインパクトは与えられたかなと思っています。

改めてみてみると、実際に実施されたこともあれば、登録制度などは、この頃考えていたこととは全く異なり、私としては現状ではダメだと思います。一方で都道府県リーグは整備が進むなど、実現された部分もあると思っています。

Ⅲ．「2010 年のサッカー環境」はどこまで実現したか（ディスカッション）

残り時間を使って、2010 年のサッカー環境はどこまで実現したか、質問も含めてディスカッションしたいと思います。

◆クラブ単位の加盟制度について－JFA クラブ申請制度

参加者：クラブ単位の加盟制度はなぜうまくいかないのでしょうか？　クラブで登録し、大会ごとにチーム編成すると、登録がうまくいかないのですか？　それが採用されない理由は、移籍などもあるのでしょうか？

中塚：それもあるでしょうね。例えば、クラブユース連盟だと、全国大会の出場枠を加盟“チーム”数で決めます。ですから、例えば奈良県の“チーム数”は重要な情報になるわけで、チームと個人をセットにして年度初めに登録させないと競技会が実施しにくいのではないでしょうか。

参加者：大会ごとに増減する可能性もあるから、ということでしょうか？

中塚：そうです。福西さん、そういうことでいいですか？

福西：そうですね。理由でいくとどうでしょうか？

中塚：たぶん理由はないと思います。すればいいと思います。実は、しているとも言えます。「クラブ申請制度」というのがありますが、U-12 と U-15 のポルベニルかしはらは、カテゴリーは違うチームだけど、同一クラブなのだと言えば、JFA 公認クラブという言い方になって、カテゴリー間での移籍が簡単にできるようになります。

参加者：だから U-13 あたりであれば、U-12 の子どもたちも、申請さえしておけば別のクラブでも出場させることは可能ですね。

参加者：クラブ別ですか？

参加者：成城学園がやっているやり方（高・中・小が一緒にしている）でしょうか？　高校生のユースリーグに中３がいることは問題ありません。

中塚：そうですね

参加者：条件は、高校の下に中学生を４つくらい申請すれば、大会ごとのつながりを出しておく必要があります。

◆地域性の問題

参加者：お話を聞いていて思ったのは、取り決めのようにして出したり、メンバーの多いチームであれば、3 チーム作れば試合に出られない人が減るという意味があると思ったのですが、それはなかなか取り入れられないということですか？

福西：それは地域性があるので少し違うかもしれませんが、奈良県はチーム数が非常に少ないです。

人口も一定の地域に偏っています。例えばビッククラブがどんどんチーム数を増やしていくことに対して、別の町クラブは脅威を感じます。ビッククラブ側にしてみれば、運営のことと選手流出を防ぐためにクラブを作っていくことの脅威があるわけです。

参加者：結果的に、みんな試合に出られますよ、ということですか？

福西：そういう言い方と、その逆の言い方ですね。どんどんクラブができていき、他の街クラブはつぶれていくということですね。ですから地域によって違うと思います。人口の多いところであれば、また大きく違ってくると思います。ただ、登録について、ビッククラブはどんどん出す方が良く、小さなクラブはそうすると、奈良県ですと人口が偏っているので、一つの所に８チームくらいできて、奈良県のベスト 8 がすべて同じクラブになってしまう可能性もあるわけです。実際に小学生でも、ベスト 4 のうち 3 チームが同じクラブということがありました。しかし、関西大会には 1 クラブしか出られないので削除されて下から繰り上がっていくのですが、そのシステムの理不尽さもあります。反対の理由には、そのようなことがあるのかもしれません。
リーグ戦ですと、このような問題はあまり出てこないと思います。カップ戦（全日本小学生サッカー大会みたいなもの）をねらうとなると、このような話は出てきますね。

参加者：街クラブというのは、例えば子どもが 100 人いると成り立つということはあるのですか？

参加者：そういうのは全然ありません。

参加者：金銭的なもの、クラブの運営上のものでもお金がかかると思うのですが。

福西：先ほど、東京などは学校の先生と言われていましたが、奈良県ですと、学校の先生で U-12 でやられている先生はすごく減りました。１つの小学校に１つのチームというのができなくなってきているのが現状です。そこの運営は、クラブは自分たちでお金を払って運営していくイメージがありますが、小学校の体育の延長のような活動になっている、スポーツ少年団などになっています。やはり地域性は大いに関係あると思います、奈良県の場合、私は中学年代ですが、何でもどんどん進んでいきます。それなりに進んでいくので、一つ何かしようとすると大きな議論になるということもありません。リーグ戦など、やるといえばすっと進んでいきます。

◆奈良県 U-13 リーグについて

中塚：奈良県の福西さんが関わっている U-15 のリーグ戦はどのように運営しているのですか？

福西：なんの問題もなくやっています。年間を通して、U-15 と U-13 の二つに分けています。U-13 はナイキというプレミアがついていましたので少しやり方を変えていますが、スケジュールの調整だけで前期後期でするという形をとっています。

中塚：前期後期の間で入れ替えありですか？

福西：そうです。U-13 の場合はチーム数が少ないので、１部２部を作るかどうかという議論をしています。大きなクラブはクラブ内でチームを分けるのですが…

参加者：2 部に参加するためには、クラブ内で 2 チーム作らないと出場できないということですね？

福西：そうです。大きなクラブの U-13 は勝敗にこだわらないので、1 部にいる必要がないので、2 部は並列のリーグを 4 つほど作り運営します。チームが少ないのでリーグ戦をするのには厳しく、1 つでするのがいいのでは、という意見です。運営も難しくなります。こんな感じで、議論をせずとも自然と運営されています。
問題は、大きなクラブの考え方が主導で進んでいることです。小さなクラブでも経営がしっかりしていればついてくることができます。しかし運営状態が良くなければついてこれず、子どもたちは別の所に散らばり消えていってしまっている現状があります。

◆クラブのイメージとリーグ構造－学校と地域の連携

参加者：中塚さんのイメージするクラブ運営は、どういう範囲ですか？　中学校区が主流ですか？

中塚：色々あっていいと思います。J のトップチームを持つビッグクラブがあっていいし、学校とは無関係の地域クラブや、学校をベースとするクラブがあってもいい。例えば、筑附高を母体とするクラブができてもいいと思います。学校の施設を使い、卒業生は年輩の方からずっといるわけですから、引退をなくせば多世代型クラブが完成します。様々なクラブがあって、協会への加盟はその様々なクラブ単位で加盟するスタイルができればいいのではないかと考えます。

参加者：主体、運営者はどういうイメージがあるのですか？

中塚：それもクラブごとですよね。それには責任者が必要になってきます。

岸　：中学校のサッカー部を主体としたクラブを作っています。西巣鴨中学校で、子どもから大人までが集まって楽しくサッカーをするということを基本としながら、その中で試合に出たい者はチームを編成して特別枠（中学生から 50 過ぎのおじさんまで）で DUO リーグに参加させてもらっています。ここで問題になるのは、公立中学の先生の異動です。理解のある先生の場合はスムーズに活動できますが、理解が難しい先生になると活動がやりにくくなります。今日の話の中で、学校の部活や教育委員会はどのように考えているのでしょうか？

中塚：そこが大きな壁ですね。教育委員会や校長先生だけが壁なのではなく、今おっしゃったように、熱心な部活動の先生が壁だったりするのです。その先生方のアタマをどうすれば変えていけるかということを考えるのですが、変わらないものは変わらないから、わかっている人たちと始めたのが DUO リーグなのです。しかし何年も経過し、公認化への流れのなかで徐々に広げていくと、わかっていない人たちも入ってくるのでおかしなことになってきます。よくおわかりでしょう（笑）

参加者：逆に、そこに働きかけないとこれから発展していくのは難しい。どうしたらいいのかなと思うのですが…

中塚：このような取り組みを具体的に始め、DUO リーグを始めて 10 数年です。はじめた当初から考えると、理解者は増えたと実感しますが、それでもダメですね。このまま進んでしまうと、10 年、20 年は変わらないという気がしています。

参加者：東京でいうと、T リーグからトップがあり、B チームを入れろというのが JFA の課題でしたが、T リーグの皆さんはその点については YES とは言ってくれませんから難しいまま進んでいます。

参加者：T リーグというのは東京の高校の半分くらいまでは入れるのですか？

参加者：T リーグ自体は上位層です。T3 まではオフィシャルの大会で、全体の約 1 割程のチーム数でしょうか。

参加者：東京都全体で 200 校位あるのですか？

中塚：高体連加盟校は 300 校以上あります。それに JCY 加盟が 10 数チーム。T リーグの下に地区トップリーグがあり、その下に地区リーグがあります。DUO はここに位置づけられ、その中で 1 部、2 部リーグに分かれています。DUO と隣接するリバーサイドリーグでコラボして「E リーグ」というものもやっていますが、それは今年度いっぱいで終了です。

◆サッカーファミリーの定義

参加者：サッカーファミリーの定義というのはどのようなことですか？　スタンドに観戦に来る人も含めてファミリーというニュアンスなのですが…

中塚：そうです。

参加者：チケットを買ってくれる人も含めて、テレビで見る人も含めてという感じですか？

中塚：そうですね。

参加者：チケットを買ってくれるというのもありましたね。今年私も会員になった「日本サッカー後援会」「チケット JFA 登録者」もファミリーになっていました。

笠野：その話で、実は僕が研究していることですが、2 年前に修士論文を書くときにサッカー協会の PHQ（プレジデンツ・ヘッド・クォーターズ）部長（兼）登録・普及部部長の所にインタビューをしに行き、その時にサッカーファミリーの定義を聞きました。ちょうどその時に、2005 年宣言でサッカーファミリーを 2015 年までに 500 万人にする～ということを言っているので、「そろそろ本気で数えなくてはいけない」と言っていましたが、その時点では定義は決まっていないということでした。いまホームページを見ると、後援会やチケット優待会員が入っていますが、では、例えば地方でテレビを見ている人はサッカーファミリーになるのか、と話していました。また、小学生の試合に親が観戦に来ている人はサッカーファミリーなのかと考えると、そのあたりは数えるのが非常に難しいのですが、500 万人という数にするには、そのような人たちを含めていかないといけないということで、正確な定義はないがそのようなことを考えていると聞きました。

中塚：当初私たちが考えていた、「2050 年には人口の２割が JFA の会員だ」と言っていた中身は、「表４．環境整備事業」の右下に記載してあります（右参照）。

参加者:これが定義なのかなと思ったのですが。

ここでいう「会員」は次のように区分される
①アスリート…JFA公認競技会及びトレセン活動へも参加する競技者
②プレーヤー…県FA主催大会まで参加。トレセン等には参加せず
③スタッフ…左記のスタッフ
④サポーター…各クラブや代表チームのサポーター、賛助会員（個人・団体）
※会費は年齢ごとの基本会費に種別ごとの係数をかける。例えば、基本会費（U-12は500円。U-15は800円。U-18は1000円。O-18は2000円）×１（プレーヤーとサポーター）or2（アスリートとスタッフ）
※各事業ごとの参加費は別に定める（参加者による受益者負担が原則）

中塚：このように考えていましたが、いま JFA がどのように考えているかはわかりません。

◆「2010 年のサッカー環境」の意図するところ

笠野：質問ですが、2010 年のサッカー環境を構想する際の目的、理想像というのはどのようなものですか？　ピラミッドの図の、底辺を大きくしてトップを上げていくということをイメージされていたのですか？　私の関心は、高校を卒業した社会人・成人・大人にあって、サッカー協会の競技者登録数が高校を卒業すると激減します。18 才までは 7〜8 万人の登録がありますが、19 才以降はどの年代も 1 万人くらいしか登録されていません。しかし、JFA 登録者は減っても、実際にサッカーをしている人が減っているわけではないと思います。スポーツマネジメントや民間会社のサッカー大会でも、休日に集まってサッカーをしている人はたくさんいます。そのような人たちをサッカー協会側がなぜもっと熱心に取り込もうとしないのでしょうか？

また、プレーする側からすると、楽しんでやれればいいじゃないか、という意見もあるのですが、修士論文の調査で、民間大会に出ている社会人の意識調査をしました。実際にサッカー協会に登録して東京都の社会人リーグでプレーしている人たちと、登録をしないで民間大会でプレーしている人の意識調査をすると、民間大会に出場している選手の方が不安に思っている度合いが高いという結果が出ました。この不安の理由は、まだ調査段階なので結論は出ていないのですが、一つはサッカーの技術が下手なので試合に出る不安がある、ということが考えられますが、民間の試合では社会人の東京都３部や４部でプレーしている人たちより上手な選手もいます。そのような人たちがなぜ不安を感じるかというと、小さい頃から、競技会に参加するために努力をしてきて上を目指すことがサッカーの本質だという価値観を植え付けられてきているのではないかと考えています。そのようなところから外れてサッカーをプレーする人たちは、自分たちは遊びで楽しんでプレーしているので、一生懸命・真剣に・真面目にサッカーをする協会の下で行うサッカーとは別だと考えているので不安が生じるのではないかと思います。

「2010 年のサッカー環境」は、構想としては良いと思ったのですが、理想像の一つとして、社会人がどうすればサッカーを続け、心から楽しむことができるかということがあると思うのですが、競技者登録数が激減しているところを見ると、やはりサッカー協会は競技力向上の組織になってしまっているのではないかと感じます。社会人が幸せな気分でサッカーができるというところを目指す育成も必要なのではないかと思います。

白井：いつも円錐形で説明されますよね。確かにトップアスリートを選ぶには周りを切り捨てていっています。ここで削られた人たちは未組織の部分に入っていっていますが、本当は寸胴方の核の部分にトップアスリートがいて横の組織もなくてはいけないのではないかと私は考えます。

中塚：全くおっしゃるとおりで、今回資料にはしていませんが、J クラブを中心とした組織作りのイメージも描いています。たとえば J クラブのトップはプロですが、J クラブのなかにも、競技を志向しないカテゴリーがあっていいと思います。そして、J クラブの周りにミドルクラブがあり、さらにそのまわりにスモールクラブがある。各クラブは様々なカテゴリーを持ち、OB だけ、中高生だけというのもあって、自由に行き来できる。地域の核となるビッグクラブがあって、そこから外れても、年をとっても、いつでもできる場があることです。

白井：円錐形の上の方にいくと、上の周辺が捨てられてしまいます。次に上がれなければやめてしまう人も出てきます。このような問題が多いと思います。

参加者：強化の方で言うと、本田圭介は、ガンバ大阪のユースには上がれなかったけど別の道を選ん

で登っていった。トップの選手はそういうことができます。

笠野:最近はトップを作るのもピラミッドが大きければいいというものではないという考え方があり、フェンシングなどのマイナーな競技は、円錐の底辺を細いまま頂点を上げていって強化する方法をとっています。必ずしもピラミッドがベストだとは言えないのではないでしょうか。

参加者：それはお金の問題もあり、JOC の強化策が取れるところでなければ予算が付かないところもあり、そこがからむので少し違う部分もあるのではないでしょうか。競技人口を増やそうとする意識があるかどうかというところですが。

参加者：競技人口が増えても、ある程度の施設がなければいけません。

◆プレーヤーの登録メリット

岸　：クラブと会員というところで、アスリートは今のサッカー協会に登録するメリットはあると思うのですがプレーヤーはメリットがないのではないですか？

中塚：協会の会員になれば保険に入れるなど付加価値を考えてあげるのがいいかもしれませんね。

参加者：先ほどの笠野さんの話ですが、高校を出たら登録人数が激減しているというのは日本全体のことですか？

笠野：そうです。プレーしている人はそんなに減っていないかもしれませんが、協会登録者数は激減します。

参加者：大学まで部活をし、社会人で仲間とクラブを作って市町村のサッカーリーグに参加していましたが、サッカー協会に登録しますが、これは日本サッカー協会ではありません。神奈川県のサッカー協会です。本人は何かわからずサッカーをしていますが、その辺の登録制度がよくわからないというのはありますね。

参加者：埼玉はかなりの数をつなげて個人登録料もとっています。先日も社会人代表枠を、埼玉は登録数が多いので 16 チーム中 4 つを確保できました。それでも少なくはなっていますが、県協会が郡市レベルに働きかけ、一度は芝グランドに招待するから、と働きかけて人数の確保に乗り出しています。それだけのメリットがある形で行っています。リーグ戦も行っています。

高原：社会人のサッカー環境について悩んでいます。今の当クラブでは小中学生が活動主体ですが、今後は社会人をいかに巻き込むかを考えています。また、社会人を巻き込んで活動していかないと、小中の育成だけでは運営も成り立たないとも思っています。
これは、先ほどの JFA 登録者数とは別の話です。高校生は施設もあるし、顧問なりの誰かが登録してくれるケースがあるので登録数は多いでしょう。しかし、社会人になればどうすれば登録できるのかわからない部分もありますので、登録者数が激減するのは当たり前のことだと思います。
悩んでいるのは JFA 登録うんぬんではなく、一旦サッカーから距離が離れてしまっている人を巻き込むときの、メリットの提示の仕方です。競技会が芝でできるといっても、大人ならば、各人のコネクションを使えばできなくもなく、そうなると組織は必要ありません。先ほど、社会人が不安を持っているとのアンケート結果がありましたが、そうならば逆に、こちらから満足させるものを出

せたなら、かかわりたいと思う仕掛け作りができれば、社会人確保につながると思ってます。
しかし、その社会人がサッカーをする仕掛けをどうつくるか。それが問題です。ピラミッドとは違う意味で何かやり方があるのではと悩んでいます。
小中高にわたって「勝つんだ」という価値観を持たされているから、大人になると必要ないので参加しなくなるという話がありました。
今はクラブで中学生までを中心に見ています。中学卒業後、高校や大学でサッカーを続けていない子がいます。そんな彼らを年に 2、3 回集めてゲームをし、社会人になっても続けられるんだという活動をしています。こんなレベルで環境を整えられるかどうかはわかりませんが、社会人がかかわりたいと思える存在であれば、あるいは必要と感じたら、そこから活動が生まれていくかもしれません。

中塚：さっき岸君が言っていた FC 西巣鴨のことです。昨日 DUO リーグの筑附高 vs 西巣鴨のゲームがあり、こちらは高校生、相手は 50 近くのおじさんもいるような試合です。西巣鴨としては、DUO リーグに関わるようになってクラブが活性化してきているようです。社会人リーグに入ってするほどではないし、そもそも社会人だけだと集まらない。おじさんと中高生の混合チームで、グランドもきちんと確保し、相手がいて試合ができる。これはおもしろいと思います。実際に昨日聞いたのは、西巣鴨のあるおじさんは、DUO リーグの試合に出場するために 10kg 減量したそうです。
年齢など関係なく、プレー環境が用意できればよいのではないかと思いました。遊び心ですね。何でもオフィシャル化してしまうと、身動きが取れなくなってしまいます。

藤田：東京都でいうと、強化と普及がバッティングしています。東京の場合はグラウンドが少ない、そこで強化しようとして、協会が大会やリーグ戦のために公営のグランドをおさえてしまいます。すると協会が場所を占領してしまったことによって、それまでエンジョイでやっていた一般人がプレーする場所を失っているのです。
昔から 40 歳以上のシニアリーグを自主運営してきたのですが、昔は東京だけで試合できていたのが、今はグランドがとれないので茨城や栃木、埼玉のグランドまで使用し、関東全域を移動しなければならない。このように、協会が頑張れば頑張るほど民間のプレーする場をつぶしていくという面もあるので、そこをわかる人が強化と普及のバランスを取るとか、廃校を利用して協会が独自の施設を持つとかして、民間に迷惑をかけないようにして欲しいと思います。

笠野：先ほど価値観という話が出ましたが、やはり価値を作っていくのは、サッカー協会が主体的に民間大会参加者に関わっていくことだと思います。資料にもありましたが、民間大会に対して後援をするだけでも変わってくるのではないかな、と思います。サッカー協会から外れて遊びでサッカーをして勝つ、というのよりも、遊びでサッカーをするということに対してサッカー協会が後援しているということになれば価値は変わってきます、サッカー協会もこれだけ大きな組織になってきているので価値も高まると思うのですが、これもサッカー協会の仕事だと思います。

中塚：スポマネさんが年末に行っている試合は、協会は後援していますか？

参加者：していません。やっと、この前ダノンカップに後援にはいると言っていましたね。

参加者：息子が行っているのですが杉並区民大会というのがあります。これは協会が働きかけて杉並区長がしています。行政がカップでも出してもらい、杉並区、文京区、協会が一緒になれば援助も出ますよね。無理ならカップだけでも…

中塚：カップは「スキンプロジェクト」で、履けなくなった靴で作ってください（笑）

育成ネタは話がつきませんが、このへんで中締めにしたいと思います。
今年度末に行う３月のシンポジウムを計画中です。これも後援をさがしているところです。上田亮三郎先生に講演をお願いしています。育成ということで高校生以下というイメージをしていましたが、学生と組むということで U-22 にまで広げていきたいと思います。大阪開催ですので、関西の方はもちろん、関東の方も泊まりがけで参加してください。

以上、続きは「ルン」で…